

養育ブック 第3版

— 改訂のねらいと活用方法について —

こどもの権利擁護研究会 村岡 薫



改訂のねらい（時代に合わせた定期点検）

日ごろの自分の関わり方をふりかえる

誰もが安定からズレてしまうものであり、そのまま走り続けるのは危ういことであり、点検を重ねていくことで自分と周りの安全を守る（車検のように）

定期的に自分をチューニングしなおすことで、周りと心地よく調和できるように整える（楽器のように）



3つの養育ブック

平成22年(2010)3月

・子どもの安全と安心を守る養育ブック

・平嶺一昭 座長(県立中里学園施設長)

平成30年(2018)3月

・養育ブック改訂版

・鶴飼一晴 座長(唐池学園施設長)

令和7年(2025)3月

・養育ブック第3版

・山川信人 座長(白十字会林間学校施設長)



作成の主旨（平成22年）

「子どもの安全と安心を守る養育ブック」

『被措置児童等虐待対応ガイドライン(H21)』を受けたもの

県内社会福祉施設で促進されている小規模化・ユニット制による住環境の個室化に伴う「ケアの孤立化・密室化」の予防のため、また、家庭を離れた疎外感、自己喪失感、不信感などからくる子どもたちの言動に向き合う施設職員や里親の悩み、迷い、ときには燃え尽きそうになる状態を少しでも和らげ…
(平嶺座長 巻頭言)



作成の主旨（令和30年） 「養育ブック 改訂版」



不適切な関わり予防と対応指針について改訂を図る

子どもたちを取り巻く環境が変わってきており、「SNS等の情報媒体の変化」や「子ども自身が抱えている内的課題の変容」、「人材確保・人材育成の困難さ、さらに「社会福祉法の改正・児童福祉法の改正・小規模化でのケアのあり方」などへの対応が求められている背景も鑑み、現状に即した内容となるようにした。（鶴飼座長 巻頭言）

15年経過していても変わらない軸 （主に予防面【第2章《p.16-22》】において）

リスクのある（配慮の要る）養育環境である
こどもの言葉や態度に刺激を受ける
言葉や態度の背景の理解に努める
愛着関係の捉え方を考え直してみる
具体的にできることを試みる



「状況を自覚し」、「理由を考え」、「対処方法を試みる」

養育ブックの活用方法 ～「使う」と決めることから～

読み合わせでも、グループワークでも。できそうなことはそのときの組織の状況で違うので、形や中身にそれほど拘らなくていいと思います。

やってみよう決めること。動き始めること。
組織長さんや主任格の方々から。



養育ブックの活用姿勢

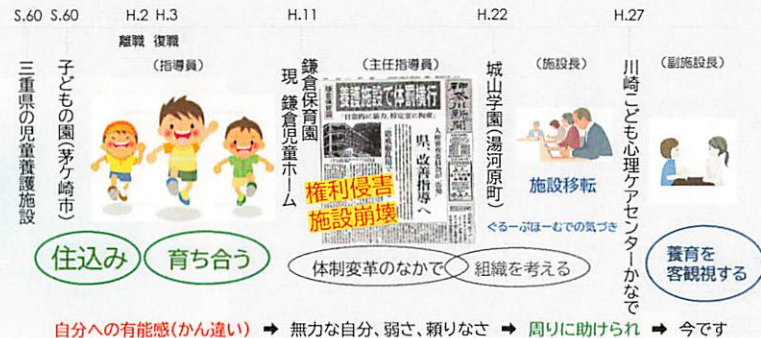
～自分たちも、いたらない（不十分）～



粗雑さや横柄さは生じていくもの。それを組織長や主任格の方たちが、とりあげるべきこととして発信し、具体的なとりくみにつなげているか。

気になることが、大人の理屈や都合で黙認（合理化）されていく組織では、養育ブックは役立たないでしょう。

自己紹介



気づけなかった時代



自分がやっている感じがあったときほど、気づいていなかったことがありました。

➡「自分にとってのやりがいがあった時代」、がそうでした。

私の場合は、違う施設で働く機会が与えられ、その経験をしばらく時間をおいて捉えなおして、ようやくかつての自分の不遜さ、尊大さに気づいた。(不遜にならない方も、もちろんいらっしゃいます)

➡私が欠けそうになるもの。「丁寧さ」「正直さ」「公平さ」。

➡神児研会長職や新規事業をしている今も要注意状況です。

そもそも権利擁護とは (p.4)

多くの人が捉えやすい言葉としては、「安心」をキーワードにすると考えやすい。



立場の弱い(意見を言いづらい)人の、「安心」が護られているか。(どこであっても同じこと)
「安心」を損なうことをしてしまっていないか。(p.5)

『言葉づかいを考える《p.5》』

...ここは村岡のこだわりかもしれません



施設によって(特に民間施設は)、言葉の使われ方がずいぶん違います。

使われる言葉(と使い方)が、その施設の文化や空気を醸すと感じてきました。

組織のヒエラルキーの強弱の査定(確認)をする

➡行き過ぎたヒエラルキーが安心を損なってきました。

立場の弱い相手にこそ、丁寧に



自負心のある(自分ができると思うことがある)状況になるほどに、人は高慢になってしまう。

高慢さは、人を見下す心持ちを生んでしまう。

組織や職員集団に高慢さが漂いだすと、組織としてこどもや弱い立場の人を見下すことに繋がりがやすい。

閉鎖的環境の二者関係でも生じやすい。

言葉の丁寧さを心がけることは、自戒につながる。

家庭(的)養育で起こりやすいこと (p.6)

- ・いろんな人と話す機会が減ってきている。
- ・養育の場の核家族化が進行し続けている。
- 「対話(グループ or 1on1)」ニーズが増えてきている。

小規模小グループの構造や、労働時間の枠組みを遵守していくことで聴き合う「場」や「機会」が減っている。

→話を聞いてもらうことでの回復が減っている



そんな思いを皆さん感じている？

新たな内容として

☆TOPIC(p.9)の後段

【対話(やりとり)を大切にする】

☆コラム(p.23)

【記録(文字)とコミュニケーション】

～ 文字と言葉の意味合いを大切にする ～



今回加えたコンテンツ

【Work】 (グループで話してみる)



(お題)

- ・『言葉づかいを考える』
- ・『自分のイライラポイントに気づこう』
- ・『グチれる、頼れる、一息つくためには』
- ・『サポートできそうな仕組みづくり』

その組織ならではの「お題」もあるでしょう。今の状況に即した一つのテーマを複数人で話してみる。

今回加えた工夫 【裏表紙】



・なかなか読む機会もとれない？

➡裏表紙だけでも貼って、目に留まるようにしてみました。

やれそうなことを試みる。施設(機関)に合う形でやることを決める。**やってみる。ずっと続かなくてもいい。**いずれ形は変わっていく。**始めなければ始まらない。**

考える題材としての『養育ブック』



読んでいくなかで、「どうしてだろう」と思うところを見つけてもらう。見つけた箇所に、「どうしてだろう」と考えたことを書いてみてもらう。

養育ブックが書き込みだらけになるほど、意識が高まっていくと思います。思いのたけを書き込んでもOK。

自分バージョンの養育ブックになるほどに、役立つものになると思います。

例えば、6 ページ 『家庭(的) 養育で起こりやすいこと』

なんで？【いつもより少し深めて考えてみる】

「なんで、言うことを聞かせようとなるのか」

「なんで、閉鎖的空間は危ういのか」

「なんで、しっかりやらなきゃと思うのか」



何ごとも理由(要因)がある



普段なにげなく「まあ、そうだな」と思ってることでも、何人かで深く考えることで見方が広がる。

理由を考えてみるのが対策に繋がる。

自分以外の人の考えを聞くことで考えが広がり、視点が増えていくのは、皆さんお感じのことと思います。

Work 1

『なんで、感情が揺さぶられるのか』

どうして感情は揺さぶられるのでしょうか。人によって、揺さぶられるポイントも違います。そしてあまり揺さぶられない人もいます。

- ① あなたはどんな状況で感情が波立ちますか？
- ② それは、どうしてですか？
- ③ また、揺さぶられたときは、どうしてますか？



グループで話してみてください

ご自由にどうぞ

あとで、いくつかのグループには
内容をシェアしていただきたいです。
20分くらいをお願いします。



Work 2

『何が助かりますか』

感情は揺さぶられている人には、どういう関わりが
落ち着きを取り戻しやすそうでしょうか。

また、それは『なんで？』でしょう？
思いついたことを、試してみれそうですか？



グループで話してみてください



「種別の特性だからこそ」は何でしょう

私は児童養護施設と児童心理治療施設の感覚はありますが、それ以外は分かっていません。

ご自身が携わっておられる場だからこそという留意ポイントがあると思います。それは私には分かりません。教えてください。



グループで話してみてください



不適切な関わりに陥らないために

〔第2章 p.16-22〕



この章のほとんどは「言うまでもない」という内容です。それだけに、あらためて確認するまでもない、と思ってしまうことがあります。

しかし、有事の内容のほとんどは、この部分の意識が希薄になってくることで起きています。

読み合わせ等で、なんどでも確認したい部分です。

伝える側の方たちへ

(リーダー・主任・〇〇長、などの人)



養育ブックの書きぶりにこだわらず、皆様のご経験のなかから、ご自分にフィットする言葉に置き換えてください。

お伝えになるときに実感を持って伝えやすくなると思います。

組織に合った活用をなさってください



養育ブックは、今日の説明以外にも多岐に渡った内容ですので、ご所属の組織に合った活用方法を考えていただければと思います。

人が人に関わる現場には、言い過ぎややり過ぎが必ず生じてしまう。それが大きなことになってしまわないように、なんどでもふりかえりましょう。